

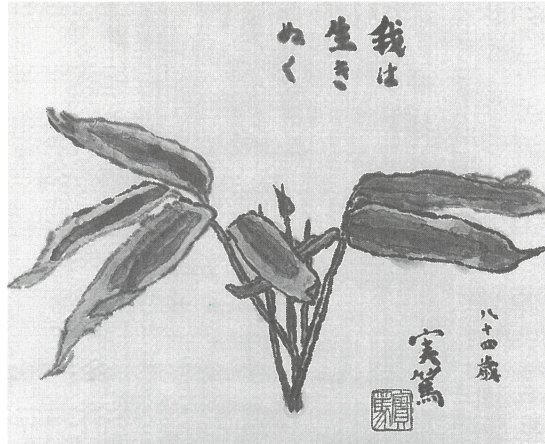
もっと知りたい

武者小路実篤

自然を愛する情熱

武者小路実篤は、山や海、草や木、あらゆる自然に対して愛情のこもった目をそそぎ、その奥深い美しさを鋭く感じとる人でした。そして、あるがままの自然から、いきいきとした生命力を感じ取り、力強く生きる元気と、こつこつ働く勇気とを受け取って、自分自身の暮らしに生かしたのでした。

笹 昭和44年



一 馬鹿一という男

実篤は晩年、「馬鹿一」という男が登場する小説や戯曲をいくつも書きました。

主人公は下山一という名前なのですが、毎日、道ばたの草や石ころを、売れもしないのに描いているので、皆が「馬鹿一」と呼んだのです。

実篤は、この馬鹿一を自分の分身（自分の性質や考え方や似た一面を持っている人）だと言います。その馬鹿一は、自分の絵を軽蔑する者に向かってこう言うのでした。

「君は（野の草や石を）あきる程見たことがあるのか、見ない前にあきているのじゃないか。よく見たことがないから、同じに見えて其処に千変万化がある、面白さがわからないのだ。よく自然を見ない奴に限って、自然を馬鹿にする。見あきることが出来るのは、下らない人間のつくったもので、自然のつくったものではない」（小説『馬鹿一』より）

この言葉などは、まさに、馬鹿一の口を通して実篤その人が言っている言葉ですね。

二 自然を見る実篤の目

自然の色の美しさ、形のみごとさ……。実篤は勿論そういうものに感動します。しかし、実篤の心に響くものは、それだけではありません。次の詩を味わってみましょう。

馬鈴薯讚

馬鈴薯よ 馬鈴薯よ
汝（お前） 土中であつてがんばる者よ。

大地の滋味を集めて
がんばる者よ。

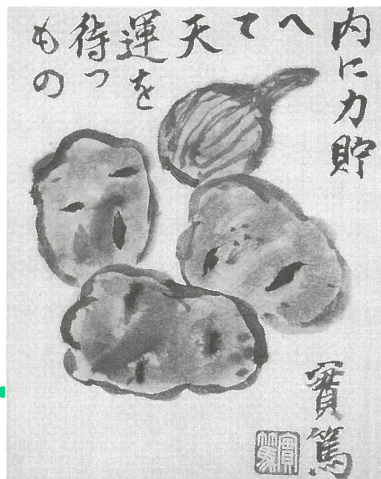
汝は見られん為にあるにあらず
生ぎんが為にある也。

生ぎぬけ
汝の花は美しけれども
その方では汝に優る者多し
汝の果実に至っては
我は思ひ出すことさえ出来ず。

だが汝の根こそ
美しく滋味に富む也。

汝は大地の子
大地の内に子をふやすもの。

我は汝によって
画をかく呼吸を教わりぬ。



馬鈴薯と玉葱 昭和15~25年

生命内に満ちて
何気なきもの。

一つの存在

あるがまゝのもの
その姿、千変万化
しかも皆
充実している。

我 汝を見ている
かゝずに静かに汝を見ている。

汝 ますます円くなり

美しくなり

力満ちて

線 益々面白くなる

馬鈴薯

我 汝を愛す。

(詩集「歓喜」より)



山茶花 昭和46年

このように実篤は、内から溢れ出て来るいきいきとした生命力や、それぞれの個性をしっかりと見抜いていたのです。

三 自然が美を愛する

美しいものを愛してやまなかった実篤の、考え方をよく現している詩がここにあります。

自然の目

美を愛するものは人間だけではない。

自然もまた美を愛する。

それなら自然に目があるのか。

ある。自然の目は人間の目である。人間の目を通して自然は自分の美しさを見たがっている。そうとでも言わないと、この花の美しさの証明は出来ない。

(『新しき村』昭和12年4月号より)

この詩を味わうと、人間も自然の一部であり、人間の中に自然が生きている。そして、目に見えない大きな自然の意志で美しいものが生み出されている、という実篤の考えがよくわかります。

四 遺稿「二つの南瓜」

実篤が、昭和二三年以来、信頼する人々と共に刊行して来た雑誌『心』の昭和五年七月号は、同年四月に亡くなった実篤の追悼号でした。その追悼号のおしまいのページに、「二つの南瓜」という実篤の遺稿(生前に発表されなかった詩文)が載っています。

自然の美しさを愛した実篤にふさわしい遺稿だと思われれます。少々長いので、ここには一部分を抜き出してみましよう。



和而不同 昭和41年

僕は画をかく。かきたいからかく。たのまれたからかくのではなく、かきたいからかく。

(略)

ともかく君達(南瓜)は美しい。何処が美しいか私は知らない。だが君達は美しい。しっかりとっている。色が美しい。形が美しい。それ以上おちついていてる。

(略)

二つのすました顔、おちついた顔。

(略)

君達二人のすました形、両方がしつかつと坐って黙っている。両方がすまして黙っている。お互いすまして、黙って坐っている。それがいいのだ。

そのすました、沈黙の姿のよき。

(略)